



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

白山, 義久

---

CITATION:

白山, 義久. あとがき. 時計台対話集会 2007, 3: 112-112

ISSUE DATE:

2007-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176930>

RIGHT:

## あとがき



白山 義久

京都大学フィールド科学教育研究センター長

京都大学フィールド科学教育研究センターの恒例行事となっており、時計台対話集も第三回を数えることとなりました。毎回趣向を変えて取り組んできましたこのイベントですが、目指すものの基本は変わっていません。それはフィールド研が正面から取り組み推進している「森里海連環学」の目指すものを、科学的な提言として社会的にも受け入れてもらうことにあります。

この学問の発想の原点は必ずしも自然科学的な演繹の思考から生まれたものではなく、森や川や海からの自然の恵みを大切にしてきた在野の方の直感に近いものと言えます。しかし、直感は自然科学においても決しておろそかにしてはならないものであります。ニュートンの林檎の逸話を持つまでもなく、偉大な科学的業績はほとんどが個人の直感と発想に端を発しているからです。そして、偉大な発想を真の科学

的な業績につなげるのは、地道な試行錯誤と実験の積み重ねであります。いま「森里海連環学」はまさにこの過程にあり、努力の結果集積しつつある科学的データが、森林と河川・里と沿岸の各生態系の連環を揺ぎなくまた定量的に証明する日も、遠い将来ではないだろうと期待しています。

しかし、「森里海連環学」には、単なる自然の理解以上のものが求められています。それは、この連環のしくみを活用して、疲弊した我が国の自然を取り戻すことです。あります。このような取り組みは、アカデミーの中に埋没しては成功しません。社会の意識が変わることが鍵を握っていると言えます。時計台対話集はフィールド研が社会に自らの研究活動を還元し、意識改革のお手伝いをする貴重なチャンネルとなっています。

初めの二回の対話集と違って、今回の対話集ではほぼ全国から市民の方に参

加していただきました。この地理的広がりが、次第にすきまを埋めていけば、今回のテーマとなった「木を活用する文化」の再生と、それが原動力となって進むことが期待される「森林の再生」から、豊かな日本の自然が取り戻せる機会もまだまだ残っているはずだと思われれます。継続は力なり。

この春に、これまでの時計台対話集の企画立案から実行までをほとんど一手に引き受けていた田中 克・竹内典之両教授が退職されました。今後、時計台対話集をフィールド研がどのように発展させていくかは、後を引き継いだものに残された重い宿題であります。

まだ社会のなかに枝を上げただけにすぎない「森里海連環」の思想が、広葉の若葉に埋め尽くされる日まで、フィールド研は今後も繰返し時計台対話集を通して人々に訴えかけていかねばならないと考えています。

### 第3回時計台対話集 講演録 平成19年6月1日 第1刷発行

編集・発行●京都大学フィールド科学教育研究センター  
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 TEL 075-753-6416

編集協力●サイファアソシエーツ株式会社

印刷●凸版印刷株式会社